

会 議 録

会 議 名	令和4年度第2回小金井市立はけの森美術館運営協議会		
事 務 局	市民部 コミュニティ文化課（はけの森美術館）		
開 催 日 時	令和4年8月3日（水）18時30分～20時20分		
開 催 場 所	市立はけの森美術館 多目的講義室		
出 席 委 員	鉄矢悦朗会長 山村仁志委員 原田隆司委員 坂井文枝委員 河田京子委員		
欠 席 委 員	加藤治紀委員		
事 務 局 員	コミュニティ文化課文化推進係 津端 はけの森美術館学芸員 中村、河上、西尾 はけの森美術館学芸顧問 河合		
傍 聴 の 可 否	可		
傍聴不可・一部不可 の場合は、その理由		傍聴者数	0人
会 議 次 第	(1) 展覧会「小山敬三展—浅間より出でその頂に至る—」の観覧 (2) 委嘱状の交付 (3) 委員自己紹介 (4) 事務局紹介 (5) 正副会長互選 (6) 運営協議会の運営等について (7) 事業報告等 (8) 意見交換 (9) その他		
会 議 結 果	別紙のとおり		
会 議 要 旨	別紙のとおり		
提 出 資 料			

【河田委員】 それでは、皆様、こんにちは。本日は御多忙の中お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。またコロナでもあり、猛暑、酷暑で本当に大変な毎日でございますが、ありがとうございます。ただいまより令和4年度第2回小金井市立はげの森美術館運営協議会を開会いたします。本日、加藤委員から欠席の連絡がありましたので、御連絡いたします。また、学芸員の中村がオンラインで出席しておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

この運営協議会は今回から2年間の任期となりますことから、委員長が選任されるまでの間、甚だ恐縮ではございますが、当館館長を務めておりますコミュニティ文化課の河田のほうで進行させていただきますので、よろしく願いいたします。

では、次第の1、展覧会の観覧につきましては、既に皆様御覧いただいたかと思っておりますので、もし感想などございましたら、また後で意見交換等のときに教えていただければと思います。

では、次の議題に進ませていただきます。委嘱状の交付です。委嘱状についてでございますが、皆様のお手元に配付させていただいておりますので、御確認をお願いいたします。本来であれば市長が参りまして委嘱状を交付するところ、市長が他の公務のため机上に委嘱状を配付しているところです。市長からは、くれぐれもよろしくお伝えくださいとのことでした。

次に、3、委員自己紹介になりますが、今回は委員の方に交代が生じませんでしたので省略させていただきます。皆様、引き続きどうぞよろしく願いいたします。

次に、事務局の紹介でございます。事務局で人事異動がありましたので、御報告いたします。事務局担当の文化推進係の小野が8月1日付の発令がございまして、健康課の新型コロナウイルス対策担当というところに異動になりました。後任には、また文化推進係で担当を充てる予定なんですけれども、現在調整中でございますので、決まりましたら後日御紹介したいと思います。

引き続き、津端は継続して美術館を担当させていただきます。

次に、会長、副会長の選出を行いたいと思います。会長、副会長の選出につきましては、小金井市立はげの森美術館条例施行規則第6条第1項の規定により、委員の互選によることとなっております。会長について、どなたか立候補または御推薦がありましたらお願いいたします。お願いします。

【山村委員】 引き続き鉄矢会長でお願いしたいんですけども、いいですか。

【河田委員】 ありがとうございます。ただいま山村委員より、鉄矢委員を会長というお話がございました。鉄矢委員に会長をお願いすることに御異議ございませんでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

【河田委員】 ありがとうございます。御異議ありませんでしたので、鉄矢委員を会長とすることと決定いたします。

では、会長から一言御挨拶をお願いいたします。

【鉄矢会長】 では、一言。よろしくお願いします。

【河田委員】 ありがとうございます。それでは、会長が選任されましたので、今後の進行については会長にお譲りしたいと思います。鉄矢会長、よろしくお願いいたします。

【鉄矢会長】 では、引き続き副会長の選出を行います。どなたか立候補または推薦がありましたらお願いいたします。

【河田委員】 推薦でお願いしたいのですが、同じく学識経験者で委員となられております山村委員を副会長に推薦いたします。

【鉄矢会長】 ただいま河田委員より、山村委員を副会長にとのお話がございました。山村委員に副会長をお願いすることについて御異議ございませんでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

【鉄矢会長】 御異議ないようですので、山村委員を副会長とすることを決定いたします。山村副会長から一言御挨拶をお願いします。

【山村委員】 よろしくお願いします。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。では、議題6の運営協議会運営等について事務局から説明を行います。お願いします。

【事務局】 会議の運営について御説明させていただきます。その前に、本日お配りした資料の確認をさせていただきます。本日、机の上に次第と資料1、資料2、また、前回の会議録を置かせていただきました。ほかにも、チラシですとか、あと、小山展のリーフレットが置いてございますので、そちらをお持ち帰りいただければと思います。

本題に入りまして、本会議の運営について御説明させていただきます。会議は年4回の開催を予定しておりまして、内容については、事業報告と今後の予定の大きく2点についての御報告と説明が中心の会議となります。事業の報告は、基本的には、前回の会議開催以降に実施した展覧会やワークショップなどの事業についての報告をさせていただくもので、今後の予定については、これから開催される事業について事前に説明をさせていただきます。

くものでございます。それぞれ担当の学芸員を中心に御説明をさせていただいた上で、委員の皆様から御意見をいただく形となります。

最後に、会議録と会議の傍聴についてですが、会議録は発言者名を明記した全文記録となります。会議については、原則公開となります。また、傍聴も、本日はいらっしゃらないですけれども、原則認めております。会議録は、皆様より校正をいただいた後、ホームページにて公開させていただくこととなりますので、よろしくお願いたします。

また、前回の委員会の際に、発言のときにお名前を一言言っていただけると、会議録、その後、大和速記の方がきちんと反映していただけるので、お名前を言ってから発言いただけるととても助かります。

事務局からは以上となります。

【鉄矢会長】 この会議の進行などについて、事務局から説明がありました。このような形で進めていくこととなりますので、よろしくお願いたします。

それでは、次第7、事業実施報告等について、まずは開催中の展覧会の内容を事務局から説明をお願いします。

【中村学芸員】 本日、オンラインでの参加にて失礼いたします。展覧会、こちらの担当をしております学芸員の中村でございます。

現在開催中の「小諸市立小山敬三美術館コレクションによる 小山敬三展－浅間より出でその頂に至る－」について資料1の開催中の展覧会・教育普及事業の（1）展覧会のところに基づいて報告させていただきます。

会期ですけれども、7月29日から開始となりました。この後、9月4日までという予定です。開館時間に関しましてはコロナウイルス感染症対策のため短縮・開館日の減少を実施しているということで、以前から引き続きこのような記載をしておりますけれども、ただ前年度からの変化といたしまして、開館曜日が月曜日、火曜日を抜いた平日と土日の開館時間も午前10時から午後4時までとなっています。2019年以降、午前11時からとしておりましたのを、以前の開館時間、午前10時からに戻しました。閉館時間に関しましては、こちらは午後4時のままで短縮した時間になっておりますけれども、この部分は前年度から少し変わったところがございます。観覧料に関しましては、一般500円、小中学生200円という設定にしております。

こちらの企画展ですけれども、既に皆様、御覧いただいたかと思っておりますので、内容については割愛させていただきます。小諸市立小山敬三美術館から作品を35点、1点、陶器

の器を拝借しております、展示を行っております。

2階の展示は当館の所蔵作品の中村研一作品を出しています。8月3日時点での来館者数ですが、かなり暑いというところと、感染者が爆発的に増加している、新型コロナウイルスの第7波が来ているところがあり、入館者数としては相当鈍いところがございます、本日までで33人です。

引き続きまして、本展の関連企画についても併せて報告させていただきます。ギャラリートークは会期中2回実施ということで予定しております。ギャラリートークも、前年度までのところでは大分縮小しておりましたが今回の展示に関しては、実施を案内した上で、ただ、急な変更の可能性もあると断りをつけて、チラシでイベントとして案内をしています。7月30日と9月3日の2回、7月30日は既に実施をいたしました。参加者が8人いらっしゃいまして、参加者の方からアンケートも何枚か来て、参加して楽しかったとか、比較的好意的な意見がありました。

この後、関連企画としましてはこれから開催で、アニメーションの制作ワークショップ、今週末、8月6日に予定されております。アニメーション制作ワークショップ「はけの森の生きものたちをつくろう」と題して、刷毛を使ってアニメーションを制作するというワークショップを予定しております。資料に示しましたように、1日のうちに3回の実施回を設けており、各回に10組程度まで参加者を募集しています。事前の申込み制としておりまして、これらの参加する回に上限を設けていること、申込み制であるというところは、資料にも記載しておりますけれども、新型コロナウイルス感染症対策で、密集を防ぐためにそのような措置をしております。

それ以外の教育普及事業としましては、鑑賞教室が本展、小山敬三展の中では9月2日に第三小学校が予定をしています。鑑賞教室も、第三小学校は昨年度に関しましては、ちょうど緊急事態宣言にかかったというところで、開催が難しくなって中止になってしまった学校ですが、今年は第7波です。なかなかその部分、見通しが難しいですけれども、ぜひ実施できるといいなと思っております。

後ほど、教育普及事業のところでも併せて、この後の鑑賞教室の予定などについては詳しく説明をさせていただくことになるかと存じます。

開催中の展覧会に関しましては以上です。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。何か質問、御意見等ありましたらお願いします。

【原田委員】 感想は、後の意見交換のところでもよろしいですか。

【鉄矢会長】 はい。

小山敬三がなぜアニメーションなのかがよく分からなかったんですけれども。

【中村学芸員】 この部分については今回、小山敬三の作品内容に関わらせるよりも、はけの森という当美術館が建っている環境に着目した形で教育普及事業の内容を考えることにいたしました。無理やり展示内容にリンクさせるより、美術館が建っているはけの森の環境に親しみを持ってもらって、かつ、その中にいろんな魅力を発見してもらおうという方向性で内容に関しては詰めています。

【鉄矢会長】 集客というか、申込み状況はどんな感じ？

【中村学芸員】 申込み状況に関しましては、担当の西尾がこのワークショップの調整をしてくれておまして、西尾さんのほうで恐らくより詳しく補足していただけるかと思うんですけれども、各回ともかなり順調に申込みが入っている状況かと思えます。

【鉄矢会長】 すばらしい。西尾学芸員は……。

【西尾学芸員】 西尾です。今回は、多目的講義室の中で行うワークショップということもありまして、3月に行ったワークショップの人数と併せて考えまして、この部屋が20人程度、保護者と児童合わせて入るのが限界なのではないかと考えて、そのように調整をしております。第1回と第3回は20名程度の参加者が集まっておりまして、第2回も10名程度参加者が集まっているといった状況です。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。

そのほか、何か御意見、御質問。

【山村委員】 はけの手アニメーションという制作ユニットは、どういう人たちなんですか。大学の学生とか。

【西尾学芸員】 いえ、はけの手アニメーションさんは、主に5人組で活動されているアニメーションのユニットなんですけれども、そもそも5名がそれぞれ独立したアニメーターとして活躍されていて、なおかつ、この近辺に拠点を構えて活動しているということで、今、ユニットを組んで活動しているということです。当館と一緒にイベントを行うことは今回が初めてなんですけれども、それ以外にも小金井市内でいろいろと活動しておりまして、昨年度のキックオフミーティングの際にも、はけの手アニメーションさんの作家さんが参加されていて、これからどんどん美術館が美術館の中だけに閉じ籠もらずに、そういう方々と活動をリンクさせていけたらいいなと考えているところです。

【山村委員】 分かりました。はけの手アニメーションというユニットは、小金井市在住のアニメーターのグループで、なおかつ、ここの美術館とは無関係にできていたユニットなんですね。

【西尾学芸員】 そうです。

【鉄矢会長】 1名がうちの特任教員、美術の。地デジカとかやっていた、はかた先生というんですけども。

【原田委員】 そうか。「はけ」というのは、崖のはけじゃなくて、刷毛のほうの。

【西尾学芸員】 ワークショップに関してはそうです。

【原田委員】 ふだん、刷毛だけでアニメを作っているわけではないんですね。

【西尾学芸員】 違います。

【原田委員】 分かりました。

【山村委員】 みんな、はけに住んでいるんですか、崖下に。

【西尾学芸員】 近辺を拠点に活動されてますが、住所まで分かりません。

【鉄矢会長】 ストップアニメーションというと、刷毛で作ったものをちょっとずつ動かして撮影していくという。

【西尾学芸員】 そうですね。

【山村委員】 面白いですね。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。

次に、今後開催予定の展覧会について事務局から説明をお願いします。

【河上学芸員】 学芸員の河上です。今後開催予定の展覧会・教育普及事業について御報告いたします。

(1)の展覧会、①、こちらは10月1日から30日、約1か月間開催予定で、「花侵庵と現代作家 No.1 志村信裕」展と題して、現代アーティストの志村信裕さんの小企画展を開催予定です。開館時間等は現在開催中の小山敬三展と同じく、時間に関しては、朝10時、午後4時まで、入館は午後3時半までとしております。休館日は月、火。観覧料は少し違うんですけども、一般500円、中高生100円。この展覧会が、展示予定作品に比較的長い、45分の映像作品が展示される予定なので、一度来て全て見れるという予定でいらっしゃる方もあまり多くないかなということで、会期中1回のみ再入場可ということで設定しております。

こちらに会場が書いてなかったんですけども、会場に関しましては、通常のように、

1階展示室は使用せず、タイトルにあるように、茶室、花侵庵をメイン会場にして、かつ、2階のラウンジスペースを使って、2会場を使って開催予定です。また、助成に関しまして、こちら、令和4年度コミュニティ助成事業から助成金が取れまして、助成というところに記載をしておるところです。

また、資料2を御覧いただけますでしょうか。こちらに、関連イベントの記載がございます。10月のところを縦に見ていただくと、展覧会関連イベントとして、10月8日にトークイベント、こちらは志村信裕さんとニットデザイナーの渋谷渉さんという方の対談イベントを開催予定です。9日のワークショップは志村さんのワークショップで、小学校高学年から中学生を対象にしたワークショップ。これは、多目的室、もしできれば外でも、お庭に出てワークショップができればというような話をしているんですけども、そういった子供向けのワークショップを開催予定です。10月22日はギャラリートークのようなものなのですが、場所を緑地に移して、担当学芸員、河上によるトークを開催しようと考えております。

また、一番下の項目、これ、開催関連ではないんですけども、開催期間中に、10月16日、こちらは小金井市の芸術文化推進計画と美術館との初めての共同企画ということで、「ダンス保育園！！」という、とても小さなお子様向け、親子向けのダンスのワークショップのイベントを武蔵野公園のくじら山で開催予定です。こちらは津端が担当しているので、その辺りは後ほど御報告できるかと思えます。志村展開催中は以上のような関連企画ないし同時開催のイベントが行われる予定です。あと鑑賞教室も、こちらの表にあるとおり、4校開催予定です。

①の展覧会、「花侵庵と現代作家 No.1 志村信裕」展については以上になります。

【西尾学芸員】 西尾です。今年の11月12日の土曜日から12月18日の日曜日にかけて、「丸山晚霞 日本と水彩画 丸山晚霞記念館所蔵作品を中心に」というタイトルの展覧会を開催予定でございます。丸山晚霞という画家は、なじみのない方もいらっしゃるかと思うんですけども、1867年生まれの1942年没、まさに日本の明治時代の始まりから第二次大戦期の真ただ中にかけて生き抜いた画家、水彩画を専門とした画家です。

丸山晚霞記念館は、丸山晚霞記念館という名前になっているんですけども、実はこちら、長野県東御市といいまして、今開催している小山敬三美術館のある小諸市のすぐ近くの東御市の市立美術館でございます。当館の展覧会開催に当たって一つの基準となっている

る、地方の公立館の特色のある作品を紹介するという意味も込めまして、こちらで改めて展覧会を行うということになりました。

なお、丸山晚霞展という企画自体は2020年に企画として当館に挙がったんですけれども、コロナ禍の情勢を受けまして、一度取りやめになったものをここであえて復活させて、もう一度やりましょうという意図もございます。

開館時間と休館日につきましては、上記2つの展覧会と同様です。観覧料は、小山敬三展同様、一般500円、小中学生200円として考えております。関連イベントとしましては、資料2を御覧いただきたいんですけれども、11月には担当学芸員、私から2回ギャラリートークをする予定でございます。12月には、近代山岳映画上映会とあるんですけれども、丸山晚霞自身が近代の山岳を自分の足でフィールドワークを重ねた画家でありますので、実際に映像として残っている当時の山岳映画というものが国立映画アーカイブに所蔵がございまして、そちらの映像をお借りして、実際に当時、登山している様子はどうのようなものだったのかということ映像作品を通して紹介するという、ちょっと大人向けの企画ではあるんですけれども、こちらを予定しております。

その翌日の4日は、丸山晚霞記念館の館長にお越しいただきまして、丸山晚霞とその時代をテーマにトークイベントを行っていただく予定です。鑑賞教室も、こちらに記載のとおり、3校、12月に行く予定です。

以上です。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。教育普及事業は今、一緒に入れていただいたということで、最初に10月に4校、12月に3校が鑑賞教室という形でやっていく。3ページの②で、鑑賞教室の実施に伴う事前授業は6校で事前に行くという。

説明が終わりました。何か質問、御意見等ありましたらお願いいたします。

【山村委員】 志村信裕さんについては前回のときに、特にここでやる意味を一般の方に分かりやすく説明してほしいというようなことも話したと思いますし、また、作家には、この花侵庵というお茶室ならでは、あるいは小金井ならではというところを作品に出してくださいということをお願いしてくださいと、ここにも書いてあります、説明をお願いしたと思うんですが、その結果というか、状況はどうか。

【河上学芸員】 本展に関しましては、私のほうで小冊子、今お配りした小山展のリーフレットのようなものを、こちらの展覧会に関しましても作成予定です。そちらに論考としてまとめて、今まさに執筆中というところではあるんですけれども、その中で御覧にな

った方、もしくは、これから御覧になる方にはそうした作品がどうしてここで展示されるかというところの裏づけとなるものを丁寧に記せればと思っているところです。ただ、実際いろいろ考えをめぐらせているところなんですけれども、なぜ小金井かというところでは、やはりリンクがしにくいのは正直なところで、もともとそういうふうには出てきた作家さんではなくて、どちらかという、花侵庵という特定の茶室とのリンクのほうが、私個人としては強くリンクしているかなというところなので、そういった観点から作品、または作品選定について御説明できたらなと思っています。

【山村委員】 いや、説明をうまくじゃなくて、志村さんが、花侵庵でもいいんですけど、作品のコンセプトとして、小金井なり花侵庵のこういうところを生かしたコンセプトを持っていらっしゃるところが、作家と共感を持ってコミュニケーションできていればそれでいいんだと思うんですよ。そこを説明してくれば。

【河上学芸員】 論考の中で、もしくは今ということですか。

【鉄矢会長】 いや、論考ではなく、具体的に志村さんとどういうふうに話して、小金井のここでやる意味、どういうふうにコンセプトに入れてくれますかというお話をしてくれたのか、志村さんに直接プッシュしておいてくれたのかという。

【河上学芸員】 はい。そのような話はずっとしています。

【河合学芸顧問】 すみません、途中で。地域ということは非常に大切だと思うんですけども、いま一つ、この間も河上さんがこだわったのを、私が後から追っかけになっちゃって恐縮なんですけれども、美術館で茶室を持っているところ、確かに幾つかありますね。そういう空間が、単に建物としてあるとか歴史がどうだとか、お茶会に使いましょう、これだって重要なことなんだけど、空間として。いま一つ、それをアートの世界として、その中でどう生かしていくか。なおかつ、それを現代作家に試してもらおうじゃないか。その中で私の勝手な解釈で、間違っていたら訂正してください。河上さんのこれまでのキャリアから、森美術館とかいろんなところでやってきた中で、現代作家でインスタレーションとしたのは、彼女にとってある種フィットした部分が非常にあると思う。志村さん自身が非常に鑑賞者との関係、コミュニケーションを大切にしている。例えば、他のインスタレーション作品とともに45分もある作品を出品する。でも、それを全員が見なくても分かるような形の中でうまくセットしている。でも、全部見てくれるということに対しての、作家と見る側のコミュニケーションみたいのはある種、すごく大切にされていて、それをかなり意識してやるんですね。なので、今の時点で全部きれいな言葉では言えないので

申し訳ないんですけども、私自身は、逆によくぞ志村を選んでくれたなど。

【原田委員】 よろしいですか、原田です。関連して。今、題名が「花侵庵と現代作家 No.1 志村信裕」、こういうシリーズがあるんだろうなということは分かるんですが、今話されている新しい展覧会のわくわくする感じが、これを見ただけだと一般市民は分からないと思うんですね。先ほどから話されているコンセプトとか、あるいは、河上さんがドキッとしたこととか、何でもいいんですけども、それを言葉にして副題についていたほうがいいんじゃないかなと思うんですけども。

【河上学芸員】 タイトルに関しましては非常に非常に悩んで、最終的にタイトルをつけないという方向になったんです。というのも、やはりタイトルをつけると、何か無理やりの部分が出てきてしまう。1つは、会場が花侵庵の展示と2階のラウンジの展示が、同じ作家が制作しているのでリンクはしますが、1つのタイトルでくくれない部分がある。どうしてもそれが難しかった。チラシとかポスターを今作っているところなんですけれども、皆さんにわくわくするような期待感を持っていただけるような広報物を、今、準備をしているところです。

【河合学芸顧問】 確かに、言葉でないとなかなか、映像というのもまだみんなに普及してないと分かりにくいですよ。

【河上学芸員】 そうですね。本当におっしゃるとおり。

【鉄矢会長】 じゃ、もう撮影は終わっている……。

【河上学芸員】 撮影ですか。

【鉄矢会長】 それこそ事前に、この美術館のホームページができたんだったら、現代作家ってやっぱり作っているシーンがすごい格好いい、作っているシーンが一番まなざしが面白いところなので、そういうのをホームページで。始めましたとか。

【河上学芸員】 制作費等々の兼ね合いもありまして、旧作の展示と最新の作品、2021年の映像作品を花侵庵に展示しますので、新しく作品を作ってはいない。最初はそういう予定だったんですけども、時間と予算の関係でそういう展示の内容の変更がありました。

【鉄矢会長】 それは大きな変更ですね。

【河上学芸員】 ただ、1つ言わせていただきたいのは、インスタレーションというものは、多分皆さんも御存じ、なかなか聞き慣れない言葉ではあると思うんですけども、1つの空間で、旧作であれ、その組合せによって、その空間自体、新しいものができるわ

けですよ。ですので、新作の映像を作ること、それはもちろん新しいんですけども、旧作をまた違う組合せで見せることも私は新作だと捉えていますので、大きな変化ではありませんけれども、それを昔のものを持ってきて展示しているだけとは考えないでいただきたいといいますか、花侵庵の中でまた新しい空間ができるというふうに、新しい展示が生まれると考えていただいたほうがいいかなと思います。

【河合学芸顧問】 要するに、花侵庵バージョンなんですよ。

【河上学芸員】 そうです、はい。

【河合学芸顧問】 それは、ここでやったということの記録になるわけ。

【河上学芸員】 そうですね。その選定に関しても、志村さん自身も非常に悩まれて、どれを展示できるかということ、本当に時間をかけて練ってくださって、かつ、今までにない難しさだと言われたんですね、この花侵庵で展示すること自体が。なので、そういった意味でも、作家さんにも大変チャレンジングなお願いをしてしまったんですけども、今、そういう形で進んでいます。

【坂井委員】 質問よろしいですか。前のときに、No.1があったかどうか、私、記憶が定かではないんですけども、No.1、志村さんという形になると、これから進んでいくというふうに先ほどおっしゃっていましたが、そうすると、花侵庵という一つの場を基にというか、そこを場として、現代作家さんシリーズが1から志村さんでスタートするというポジショニングなわけですね。そうすると、それは例えば、今回、志村さんは映像なわけですけど、次に造形があったり絵画があったりというビジョンはどういうふうにお持ちなんですか。どのぐらいのシリーズが何個あって、映像が始まる、次は絵画で何とかで、それを年間スケジュールの中でどんな感じで行われていくのか。

【河上学芸員】 年間スケジュール自体をなかなか出せないところなので、本当に5か年とか10か年みたいところでしか考えられない……。

【坂井委員】 そうすると、思い出した頃にNo.2が来て……。

【河上学芸員】 そうです。ただ、定期的に、理想としては2年に1回とか……。

【坂井委員】 そうですよ。それは必要だと思いますよ。

【河上学芸員】 そういうイメージです。

【坂井委員】 それは貴重なエビデンスじゃないですか、皆さんがお作りになったものが次の世代に。

【河上学芸員】 なので、狙いとしては、一度1と出せば必ず2をできるという。

【坂井委員】 それはいいことですね。それはそうですね。

【河上学芸員】 はい。

【河合学芸顧問】 確かに、4月でしたっけ、私も初めてそのときに見たという感じだったんですけど、たしかなかったなと思って、でも、1と。

【河上学芸員】 入れました。

【河合学芸顧問】 そうすると、次につながる方向性ね。漠然としてでもあるからいいな。

【坂井委員】 そうそう、それはいいと思います。

【山村委員】 館長はどうお考えなんですか。

【河田委員】 展覧会自体の予算が、先々のお約束ができない状況ではあるんです。

ただ、来年こういうことをやりたいというものを、熱意だったり根拠を持って市としては予算をつけてもらえるように努力は今までもしてきましたし、今回もこういう形で予算がつきましたので、ぜひこれからも継続して努力はしていきたいと思っています。

【山村委員】 山村です。さっき、似たようなお話をしたんですが、一般の市民の方にとってこの美術館が、この展覧会がどう見えるか。この美術館が何をやっているかということに関心を持っている方も確実にいるわけですよ。そういう人たちからどう見られて、恥ずかしくない美術館でありたいという。それは、やっぱり信用の問題だから、必要だと思うんですよね。ただ、いろんな条件が悪いのはもちろん分かっていますよ。それぞれ与えられた条件は非常に厳しい。継続できるかどうか分からないけれども、しかし、展覧会のタイトルとか方向性とか方針とか、責任を持って説明できるようにしておかないと続かないんですよ、その後に来る人に対しても。だから、ここの美術館の主体性というか、責任を持った運営が必要だから、我々も多分、いろいろ意見を言っているんだと思うし、一般のほうから見たらこう見えるよということをお話ししているつもりなんですよ。河合さんもすごく応援していらっしゃるんで、そういう人たちにどう説明するかという、それを聞きたいと思って聞いているので、熱意をここで示されるのはすごくいいんですけども、我々もまた外に出れば一般の方に、いや、ここ、こんなふうに行っているんですよみたいなことを言う立場でもあるので、その言葉を聞きたいんです。No.1とつけちゃうと、確かにNo.2があるんだよね、いつですかと聞かれると思うんですよ。次、何をやるんですかとか、そのときに、いや、分かりませんとかと言うのは自分としてもすごく無責任な感じがするんですけど。ということは今、館長にお聞きしたんです。

【河田委員】 分かりました。

【河合学芸顧問】 正直な話、そこまで多分、スタンスとして、毎年はできなくても、やっぱり今のスタッフの中で一つのスパンって決まっちゃっているところがあるわけですね、ここの美術館の場合、5年の枠の中で。そこで、さて、どこまでできるのよといったときに、あえて番号というか、1と入れたというのは、次に何かつなげたいという、現時点ではまだ漠としている。そういう意味では、宣言でもあるけれども…むしろ花侵庵、せっかく着目して、うまくここをアピールしたいなというのにもつながらないかなという気がしています。

【山村委員】 だから、「花侵庵と現代作家」というシリーズを続けるという意思があるというふうに組織的に徹底したということであれば、それでいいと思いますよ。

【河上学芸員】 ただ、本当に意図的につけてはいるので、次がやりたいという意思が、個人的にも学芸としても持っているからこそ「No.1」とつけさせてもらったのと、あとは、こんな話をここでしていいか分からないですけど、やはり5年の任期が終わった後に、次の方々が、どんな方が来るか分からないですが、ここの美術館は現代をほとんど扱ってきけてないと思うんですね。なので、私は個人的にここに着任して、ここで働かせてもらうことになって、現代をやってきた人間としては、今後も、この後も現代を専攻されている学芸員さんなり研究者の方がここに來れるような余地みたいなものを、この現代作家シリーズを設けることで、そういうふうが続いていったらいいなというようなことを個人的には思っているところです。

【坂井委員】 でも、それこそ、本当に山村さんがおっしゃるとおり、意思表示みたいな感じでNo.1とつけられたということだと思うので。

【山村委員】 それを、館長さんがこれでオーケーとおっしゃったんだから、そういうことですよね。館としてそういう方向に、学芸員がどう替わろうが、中長期的には持っていらっしゃるということでもいいんですよね。

【鉄矢会長】 やることの問題は、そんなに私は理由はいいんですけども、前回の議事録にあるように、運営協議会自身の中で、学芸員が新作は茶室のほうでというように説明をして、我々は、だったら頑張ってくださいという応援を言ったんですよ。

【山村委員】 ということを言ったんですよ。

【鉄矢会長】 その発言が協議会の中で行われて、我々は納得したので、今度それが、4月の終わりのときの予算でできないという状況じゃなくて、そういうふうに学芸員がや

らせると言ったらおかしいですけど、これができると言ったことがひっくり返ったことのほうが私は気になっているんですね。それが協議会で、分かりませんでしたらまだよかったんですけど、何となくやりますと言ったのが、今、旧作でも新しくインスタレーションすれば新作ですって、アーティストとしてはそういうふうに言います。インスタレーションですからそういうふうになるんですけど、ただ、その前の学芸員の頭の中に、やってほしいというのがあったと思うんですよ。だから、その辺が、もう時間的に厳しいのかもしれないですけども、ちょっと説明が欲しいなと思っているところと、なぜそうなってしまったのかという。

【河上学芸員】 まず、最初の話では、志村さんのほうで、花侵庵のお庭の周りの木々なんかを撮影して、それを作品化しようというようなお話があったんですけども、その撮影費が助成金で捻出できなかったというところ。それと、季節も変わるとか、結局コンセプトがどんどん変わって行ってしまっ、最終的に出てきたものが、2021年の旧作というか、一番新しい作品をここに展示したらぴったりにゃないかというところを考えが落ち着いたと。私も、私はこうしてほしいというのはもちろん、新作を撮影していただくのが一番、それはもうこのための展示になるので、もちろんそれはすてきだと思いますけれども、実は知っている作品というか、見たことがある作品をここに持ってくるのもすごくいいなと思っていたので、私自身が妥協したというところではないですが、プランが変わったのは確かなので。

【鉄矢会長】 事前にそういうのが協議会に正直にしゃべっていただくのは私はすごくいいと思っていますので、今の中で、妥協したのではないというところがすごく大事で、いいと思ったからをもう少しすてきな言語に変えていただければ、多分市民も納得できるんだろうと思うんですよ。その辺をぜひ練ってほしいと思っています。

それから、やっぱり花侵庵という空間なので、撮影はしなくても、この空間に来てスケッチを起こすとか、どうやっているのかというものを、実際の場面をちょっと手元を映すとかだけでも、数十秒しかインターネットなんかで見ないですから、多分、インターネットで今こういうのが始まるという期待感を、この現代アートの、もっと期待感がするよという。このタイトルだけでは市民が来にくいといったときに、もう少し事前の映像とか、現代作家の面白そうなところをかいつまんて美術館のホームページなんかで事前にちょっと知らせていただけるとわくわく感が高まるかなと思っています。何か、本当にクリストじゃないけど、スケッチだけでも格好いい作家って格好いいのは格好いいので、いろんな

ものを。

【河上学芸員】 志村さんはとても協力的なのと、あと、私以上に来館者の方の目線に立つ方なので、そういった御相談はできるかと思います。

【鉄矢会長】 こうやって桜を見ているシーンがあるだけでもいいと思うんですけどね。

【河合学芸顧問】 だから、具体的には、どこまでこちらのほうで演出したところで見られるかということですよね。作家が現場に来て、いろいろと細かいことを決めなきゃいけないときに、最低限の映像なり撮れるかどうかということですよね、もしやるとしても。

【河上学芸員】 そうですね。

【鉄矢会長】 何かあるといいですね。

【河合学芸顧問】 うん。

【鉄矢会長】 意見です。

【河上学芸員】 ありがとうございます。

【河合学芸顧問】 ありがとうございます。

【山村委員】 この場所でしかできないユニークな、映像、インスタレーションになると思うんですよ。映像が旧作の映像であっても、インスタレーションの仕方が花侵庵でなければならぬようなインスタレーションの仕方ってやっぱりあると思うんですよ。それをぜひ工夫してほしいし、できる限りの予算に縛られる、時間も縛られる中、また、いろんな条件で非常に不利な中においても、その中で工夫をして、小金井でなければならぬ、花侵庵でなければならぬというところを作家と学芸員が協力して、お互いに言葉、努力、形、インスタレーションの施行、そこまで含めて、ぎりぎりの努力をした上で一般のお客さんが納得してくれる。これはここのために作ってくれたんだというふうなものをぜひやってください。

【河上学芸員】 やります。

【山村委員】 なおかつ、原田委員から意見があったとおり、副題とかチラシの文章とかチラシのデザイン、広報に回す言葉の一つ一つがそういう必然性のある、ここでなければならぬんだ、はけの森美術館でなければならぬんだというところをぜひ工夫してやってください。そうしないと、不審な目で見られちゃうと思うんですよ、何でこれがここであるのみたいな。同じことをずっと言っているんですけど、ぜひ。

【河合学芸顧問】 インスタレーションなり現代作家の場合というのは、賛否というの

は相変わらずあるのは、その中で生きてきた人間としては分かるつもりですし、それをできるだけうまく鑑賞者と対話をしたい。その介在として学芸員がいて、また作家自身も今は、そういうふうに積極的に対話のほうに出てくるということになってきた。その中で、志村さんはそれができるタイプかなというのは私なんかも思うものですから、全てがリーフレットなりで、印刷物で完結できるとは思いませんけれども、展示の中なり、またやっている最中で少しでも具現化できればいいな。お金をかけなくてできるものがどれだけあるかなというのは、コミュニケーションのツールを今少し考えられるかなというのは思っております。その辺、ちょっと調べております。

【鉄矢会長】 あと、先ほどからちょっと出てくる、映像が旧作だという表現がちょっと違う気がしていて、アーティストが持っている素材である。アーティストがもともと持っていた器とかそういうものをインスタレーションに持ってくるのと同じですよ、作家によっては。インスタレーションするのに、そのとき全部新作で手作りで作るわけじゃなくて、昔からあるものを使うとか、いろんなものを使うということなので、多分映像作家だからこそ、撮ったものがいつのもので、発表したものだから、それを旧作と呼んじゃうと、もしかしたら新作、さっき言った勘違いをさらに膨らませてしまうかもしれない。

【河上学芸員】 文言としては、「旧作」というふうな表現は特に……。

【鉄矢会長】 いつの映像作品と。

【河上学芸員】 「(何年)」というような表記でしか示さないですし、そういったことに特別触れることはない、今、ここの議題に上がっている。

【鉄矢会長】 詐欺にならないように。うそにならないで、正しいことで、正しいんだという感覚をどういうふうに書き込めるかですよ。

【河上学芸員】 あとは、やっぱり山村先生が今御指摘いただいた、小金井であるというところのキーワードが実際、私はまだ難しく、また、市民の方が本当に、小金井であるという一つのキーワードなり言葉なりの表現、どういった表現が一番いいのかとか、それをまだ悩んでいるようなところですが、ただ、花侵庵という空間は非常に特別な空間ですし、普通のお茶室とは違うと私は考えているので、そういったところからつなげていけたらなど。それが市民の方々には、それじゃ分かんないよということになるかもしれないんですけど、できる限りにおいてきちんと説明をできるようにしたいと思います。

【鉄矢会長】 志村さんって文字は書く方なんですか。

【河上学芸員】 書きますね。

【鉄矢会長】 ああ、そう。じゃ、志村さんが読み解く花侵庵というのがしっかり書いてあるだけでも。

【河上学芸員】 打診はしています。

【山村委員】 自分の感覚だと、コンセプトシートを書いてくださいというのが個展の一番最初の最初なんですけどね。

【河上学芸員】 もちろんそうです、はい。

【山村委員】 今、実際に来年の展覧会で動いているやつがあつて、もう2年前に書いてもらいました。コンセプトは。その中には、上野という地域をすごく掘り下げてあつて、上野って名称に単純に固執しているのではありません。上野がかつて江戸時代はどうだったかとか、鎌倉時代はどうだったかということ調べて書いてくれていて、ここは墓場だったとか、海の近くで、こういう海があつたとか、こういう神話が残っていると、昔話はこんなのがあつたとか、いろんなことが盛り込んであるんですよ。作家が調べて、リサーチするから。そういう意味で言っているんです。別に行政的な部分で言っているんじゃないで。

【河上学芸員】 もちろんそういう掘り下げ方の作品って、私もすごく好きなんですけど、ただ、志村さんに関しては、そこの土地の文化だったり歴史だったりをリサーチして作品を作るという、そういったものももちろんこれまであるんですが、今回に関してはそういうアプローチの仕方ではないので、そういう意味も込めて、小金井というところを、小金井であるべきという説明が非常に難しいなと思っています。

【山村委員】 花侵庵でもいいんですよ、もちろん。花侵庵でもいいんですけど、花侵庵の意味とか、花侵庵の空間が持っている特性だとか、そういうのを作家自身が言葉にしてもらわないと。

【河上学芸員】 作家自身がですか。

【山村委員】 うん。

【鉄矢会長】 そう思っています。作家が自分の言葉で花侵庵をどうひもとくか、どう読み解くか。

【河上学芸員】 それは作品ではなくて、言葉でですか。

【山村委員】 だから、コンセプトってそういう意味じゃないですかね。コンセプトは、普通作るよね。

【河上学芸員】 そうですね。ただ、本当に話合いの中で制作していったというところ

なので、こういうコンセプトです、はいというような形で今回は進んでないので。ただ、ここの制作をするに当たって、どういったコンセプトなり、どういう場所でどういうインスピレーションを得たとかというようにお話を文字に起こしてもらおうということはもちろん可能だし、私もしていただきたいなと考えていたので、ぜひやっていただけたらなと打診をしてみたいと思っています。

【鉄矢会長】 話合いで進めていく場合は、打合せ記録なり何なりで、この人のキーワードがこうあるとか、何とかしておいたほうが本当はいいですよ。

【河上学芸員】 作家さんによりませんか。作家さんによるんじゃないかと。

【河合学芸顧問】 最初というか、ちょっと分からないですけど、基本的にやるという。実は小金井市の当局に、ここの美術館のというか、文化のそれでどういう位置づけなのかな、ここはというのを。さっきは、花侵庵というのに対しての位置づけみたいのを、美術館かな、で、これを何とか位置づけてみようかなというのは一つあったわけけども、実際に作家と対峙する場合に、内部的なことと言えば、基本的には、作家からもらう前に、こちらで基本的なプロットを作る中で、それでいくじゃないですか。

【山村委員】 両方ですね。

【河合学芸顧問】 両方でね。それで、彼らも、だったら何をここでできるかと。

【山村委員】 学芸員がコンセプトを自分で書いてそれを渡して、それをつくる作家が、分かったとか、そういうはずですよ。

【河合学芸顧問】 やっぱり繰り返しになっちゃうけれども、ここでやる意味みたいのまで含めたところだったと思うんです。ここでやる意味というの、幾つもの理屈はあるんだけど、先ほど言ったからこれ以上は言いませんけれども、内容に関して言えば、これは今からは河上さんと志村さんのバトルでというか、モデリング、スケジュール表が大分できているとは思うんですよ。いつここに来てやって、業者さんが決まったらここに入って、具体的にどういうふう処理していくかというのが。その過程でやれるものと、またやれないというのが出ちゃう可能性があるわけなんです。だから、正直な話を言えば、かなり長いスパンで本当は予算的にも確保されてやらなきゃいけないところがあると思うんですよ。借りてきて、それを並べるといふのとちょっと違ふとすれば。それをあえて今やろうとしているわけですから、ちょっと無責任な言い方だけれども、作家に頼っちゃう部分もなきにしもあらずかなというのはあるんですけどね。我々がというか、学芸のほうがどんなに頑張っても、作家のほうがというのは確かに。作家が持った企画を

買うわけじゃないわけだから、というのはちょっと感じていて、言い訳でしかなくて申し訳ないんですけども、今、言っているのは。内輪話というか、愚痴話です。

【鉄矢会長】 いえいえ。学芸員が選んで、これが絶対ここにやるべきだと思ったことを信じていますので。

【河合学芸顧問】 ありがとうございます。

【鉄矢会長】 それはいいんだと思います。ただ、そこに至ったところを分かりやすく、いいと思ったからというだけじゃないことを言語化してほしいというのと、多分、私たちが見る志村さんの、今回のものだけじゃなくて、過去も見ているので、過去からの流れから今の位置づけを、今回の位置づけをしてあげることによって、実は志村さんという作家の育て方だと思うんですよ。にも関わるんですよ。

【河上学芸員】 私としては、志村さんにここでやってもらえることはすごく大きいことで、美術館にとって。もちろん志村さんのキャリアにとって、何か一つステップになってもらえたらもちろんうれしいんですけど、それよりも、知名度としても、これまでのキャリアからしても、やはりここで第一弾で現代作家としてやっていただくには、知っている方は誰もが知っている作家さんという位置づけで今回、一つ選定のキーになったところなので、若手でとかということではなくて、ある程度のキャリアを積んで、国際的にも国内でも作品を発表しているというところから、本当にお願しているというような気持ちも大きくあるので。あとは、若い方にこの美術館に目を向けてほしいということも大きくあるので、そういった意味では、例えば、近隣の美大とかの美術、芸術学を学ぶ学生さんたちが、あっ、志村信裕やるんだというふうに引っかかってくれたらいいなということも大きくあるので、私は志村さんと同世代なので、育てるというよりも一緒に……。

【鉄矢会長】 一緒にやるでもいいけど、表現はどうでもいいんですけど、学芸員が胸を張って、作家とガチでやっていくときに、やっぱり作家を応援しているということ自身が、作家が今までやってきたことを、作家はただ無我夢中でやっていたりしているのを整理するのが実は学芸員だったり、あなたの過去、こうだよねと言って、今の位置のはけの森でやるということはこういう意味があるんじゃないのというのが書かれるだけでもいいんだと思うんですよ。だから、ここの部分だけの話じゃなくて、過去も知っているから書ける人というのもいるんだと思うんですね。見てきたから。なんていうことを期待しています。

【河上学芸員】 ありがとうございます。頑張ります。

【坂井委員】 1つだけよろしいですか。河上さんがおっしゃる志村さんの作家性とか、すばらしいキャリアと今後のポテンシャルみたいなことはそうなんだろうと思うんですけど、申し訳ない、私は小金井市民として志村さんを存じ上げない。山村さんの御心配なさっていることの向こうには市民視線というのがあると思うんですけど、一般の市民視線として、茶室だったら生け花があったり工芸があったり、お軸があったりという展示が、それがなきゃ、映像のインスタレーションというところの素朴な疑問に、上から目線ではなくて、どういうふうに素朴な質問に答えていけるかというところがすごく大事なのかなと。そういうことを言われなくても、河上さんが期待するような、美術に関わる若い人たちは、おっと思うかもしれないけど、そうじゃない、おっじゃない人たちに対する、普通に税金を払っている市民に対する視線というのを私はすごく期待したいなと思います。

【河上学芸員】 そうですね。市民目線というのが、私、とても難しいなといつも思っているんですけども、どこを中心に考えたら市民の目線になるかというのは常に意識をしなければいけないと思っているので、今の御意見はちゃんと考慮しながら取り組みたいと思います。

【鉄矢会長】 その他、何か御質問、御意見ありますか。大丈夫ですか。

では、8番目の意見交換等について。結構意見交換しましたね。

【坂井委員】 私、まだ小山敬三さんのこちら、拝見してないんですけど、後ほど参りますのであれですけど、小諸市立で個人の名前を冠しているというところで言うと、どうはけの森美術館と共通性があるのかなという感じがするんですけど、小諸市立小山敬三美術館は、小山敬三さん以外に、先ほど河合さんもおっしゃったように、中村研一さんつながりじゃない企画がなかなか出てこない、難しいみたいな環境がこれまであったような感じがするんですけど、こちらの美術館もそんな感じなんですか。ほかの企画とか、どういう形で小山敬三美術館はなさっているのか、中村さんに教えていただければ。

【中村学芸員】 ありがとうございます。小山敬三美術館も、そういった意味では、実は当館の設立経緯としては、確かに御指摘のとおり、非常に近いところがあるんですね。小山敬三美術館は、小山敬三自身が建物を建てて建物とその中に入れる自分の作品を小諸市に寄贈するという形で、小諸市の市立美術館になっております。当館に関しては、建物と作品を寄贈したのは、これは中村研一の遺族である中村富子夫人ではありますけれども、画家当人もしくは、画家に極めて近い親族から、建物と作品がそろった状態で市に渡って、市の運営になっているというところでは非常に似通っているんですね。

小山敬三美術館は、そういった意味では、実は当館以上に小山敬三と切り離すことのできない形で成立している美術館です。建物を建てる時に、画家自身が設計とかそういうところをどうするかということも含めて自分で決めている。建築家はこの人にするという辺りも自分で決めて、お願いして造ってもらって建てています。小山敬三美術館は基本的に小山敬三作品を展示をすることをずっと続けている美術館です。小諸市の市民文化祭ですとかそういったものに関連する形で、市民の作品を展示することはやっているそうですけれども、ただ、そういうときにおいてさえも、小山敬三の作品を完全に撤去してしまって全部入れ替えちゃうということはしていないそうです。なのでやはり常に小山敬三のための館であるとかかなり強く意識されているんだろうなど。今回借用交渉したときに改めて感じまして、実は最初、私もかなり欲を出しまして、あれを貸してくれ、これを貸してくれと小山敬三美術館の担当の方をお願いをしていたんです。けれども、そうしましたら、うちに展示するものがなくなるということと、それから、この作品は館の外に出したことがないんだというものが結構ありました。そういうものをお外に、ある意味、旅をさせるようなことは心情的な面からしてもできないと。改めて館にとって作品というのが、館と一体化したようなものという、そういう不可分の価値とみなされているところをひしひしと感じました。

【山村委員】 これ、懐古園の中にある美術館ですよ。違ったっけ。

【中村学芸員】 はい、そうです。懐古園を抜けていったところです。

【山村委員】 割と小さい美術館ですけど、懐古園の中の美術館として定着しているの
で、それなりの知名度がありますね。

【坂井委員】 なるほど。

【鉄矢会長】 要するに、ちゃんとルートがあるわけですね。

【山村委員】 そうですね。

【坂井委員】 分かりました。ありがとうございました。

【河合学芸顧問】 建築家が村野藤吾か何か。

【鉄矢会長】 村野藤吾って書いてありますね。

【原田委員】 よろしいですか、原田です。小山敬三という人は初めて知りました。中村研一とほぼ同世代ですよ。同じ頃に生まれている。

【山村委員】 3つ下かな。

【原田委員】 どちらかというと裕福な家庭で育っている、自分の美術館を持っている。

共通点がすごく多いんだけど、画風が全然違うというのが面白いなと思いましたね。どうやって違ってくるのか。僕は、土曜日の中村ひのさんのギャラリートークのときに行きまして、中村さんのトークが面白くて、とにかくぐいぐい前に出てくるんですね、学芸員の中村さんの熱意が。この作家はすてきなんですよ、私はこの絵とこの絵が好きなんですよというのががっとうっているものですから、僕も好きになりました。

その熱意が一番よく表れているのが、いろんなところに表れているんだけど、絵の説明ですね。このくらいの、何文字にもならない、普通は割に冷たい感じで書いてあるんですよ、客観的に。ところが、中村さんのキャプションはそこも熱がこもってまして、例えば、僕、書いてきたんだけど、南欧風景というところに、「オーシャンビューのすてきなベランダ」って。普通そういう言葉はつけないと思うんだけど。さらに、「作家は、ただぼんやりと時を浪費したわけではない」と書いてあるんですね。これ、小山さんが聞いたら、「いや、俺、ただぼーっとしてただけだよ」と言うかもしれない。だけど、そこにこの展覧会を企画して、小山敬三すごいぞという感じが解説の文章にも出ていると思いました。

もう1個、「御宿海浜図」。何か、日に焼けた漁師のおっさんを描いたのかなと思ったら、そこには紛うことなき海女と書いてあるんですね。紛うことなき。こういう言葉遣いが非常にいいなと思いましたね。そういう意味で、展覧会というのは、絵や作家と鑑賞者との対話であると同時に、今日もいろんな話が出ましたけれども、学芸員と見る者との対話である、そういうことをこの展覧会では強く感じました。

余談というか、余計なことで、最近、「日曜美術館」がすごくつまらなくて、何かすごくかしくまって解説しているでしょ。ところが、BS日テレの「ぶらぶら美術館」、これは美術館に芸能人が行くんですけども、ひたすら学芸員の自慢話を聞くんです。この絵、すごいでしょ。今度の展覧会、こんなにすごいよ。学芸員が1時間にわたって案内しながら。これ、すごく面白いんですよ。だから、絵ってそういうものなのかなと最近感じております。

【鉄矢会長】 ギャラリートークファンになりますね。

【山村委員】 中村さんは、何で小山敬三をやろうと思ったんですか。

【中村学芸員】 最初に興味を持ったきっかけは、2018年の国立公園絵画のときです。そこで小山敬三の浅間山の描き方が気になった。私、実は群馬県出身で、群馬県からずっと浅間山を見て育ったものですから、浅間山の形が長野県側から見ると、当然では

あるんだけど、自分が見ていたのと違う。それで調べてみたら、この人、やたら浅間山ばかり描いているけれども、何でそこに至ったのかというところがさらにすごく気になった。先ほど指摘がありましたけれども、中村研一と境遇が似ているんだけど、たどり着いたのが全然違うところが、やっぱり非常に面白いなど。ギャラリートークでも私自身はかなり推したところなんですけれども、昭和のいかにも大家というふうに使われている人たちを丁寧にひもといていくと、大家と言われて、画風がいかにも固まった、似たようなものになっていっちゃうということではない。そこに至るまでに、やっぱりその人なりのそれぞれのいろんなストーリーがあって、その結果、突き詰めてたどり着いたものにはそれなりの必然性とか魅力とかがあるんだと。改めて小山敬三という人はそういった面白さ、魅力が非常に分かりやすい人だと思ったので、そういったところに、今回すごく推したいポイントというか、引かれると思ってやっております。

【山村委員】 なるほど。前回、色をテーマにして中村研一の展覧会をやられた。小山敬三も色と形とか、そこまで突っ込んでやっていくと、結構比較できる部分が、どこが違うのかとか、どこが共通しているのかとか、そういうことが、また西尾さんのやった展覧会と中村さんのやった展覧会と比べていくと……、あっ、違ったっけ。

【西尾学芸員】 私ではなく河上です。

【山村委員】 ああ、そうか。河上さんがやった展覧会と、中村研一における色と形というのと、小山敬三における色と形がどう展開していった、そこまで学芸員同士で議論していくと、もっといろいろ見えてくるんじゃないかなという気がするので、興味深く聞いていました。

【中村学芸員】 ありがとうございます。

【鉄矢会長】 それでは時間ですので、事務局から連絡はありますか。

【事務局】 おつかれさまでした。久々の現代作家の展示ということで、いただいたご意見参考にさせていただきます。花侵庵と現代作家のシリーズ化についてもご期待に沿えるよう努めたいと思います。

【山村委員】 山村です。今の話、すごく重要で、花侵庵と現代作家というシリーズを作るに際して、中村研一との関係とか、さっき、色と形の話をしたのも、そういう気持ちもあって、現代作家にも通じるところがあると思うんですよ、空間の置き方とか映像、インスタレーションを置くときの空間への配慮の仕方とか、中村研一がどんなふうモチーフを配置したとか、建築についてどういう意見を持っていたとか、そういうことも絡めて

説明していくと、何で現代作家を持つてくるのかという必然性にもなるし、この美術館のアイデンティティーにもなるので、ぜひシリーズ化していただいて、そこまで学芸員同士でも話をしていただくと、油絵と映像とメディアは違っても、現代と近代とそんなに違わないということが分かるんじゃないかと思ったので、ぜひシリーズ化をよろしく願います。

【鉄矢会長】 ほかにありますでしょうか。

なければ、以上ではけの森美術館運営協議会を終了します。お疲れさまでした。

— 了 —